19 世紀アメリカにおけるカンバセーションによる教育と自己啓発
―知のコミュニティの形成に関連して

倉　橋　洋　子

はじめに

19 世紀アメリカにおいて、ニューイングランドのトランセンデンタリストをはじめとする知識人は、ソクラテスが実践した問答法に繋がるカンバセーション（conversation）の機能を重視し、教育や自己啓発の手段として活用した。その結果として知のコミュニティが形成され、また知のコミュニティにおいてカンバセーションが行われた。文学作品においてもカンバセーションの機能が描かれている。

19 世紀にカンバセーションの機能を認識し、その概念を展開した人物としてトランセンデンタリストの思想家、ラルフ・ウォルドー・エマーソン（Ralph Waldo Emerson）が挙げられる。また、多くの批評家や伝記作家は、マーガレット・フラー（Margaret Fuller）による大文字の“Conversations”（談話会）と称したカンバセーションを活用した女性のためのクラスに言及している。たとえば、クリスティーナ・ズワルグ（Christina Zwarg）は、カンバセーションがフラーとエマソンを関連づけてきた言葉であると指摘している（Zwarg 3）。また、ソクラテスやプラトンを例に挙げて、エマソンの考える女性とカンバセーションとの関係も論じている(267)。これらのことから、カンバセーションと言えばエマソンやフラーが想起されがちである。

しかし、エマソンやフラー以前に、勉強会や授業などにカンバセーションを取り入れて実践した人物として、ユニタリアン派の牧師、ウィリアム・エラリー・チャニング（William Ellery Channing）、トランセンデンタリストのエイモス・ブロンソン・オルコット（Amos Bronson Alcott）、さらに教育者のエリザベス・ピーボディ（Elizabeth Peabody）や彼女の妹のメアリー・ピーボディ・マン（Mary

Peabody Mann）などがいた。加えてマンは、『フォアニータ』（*Juanita: A Romance of Real Life in Cuba Fifty Years Ago, 1887*）においてカンバセーションの機能を取り入れている。

本稿では、今日のアメリカのディスカッション形式の授業の基礎を築いた、19世紀アメリカにおけるカンバセーションの実践、理論化、応用から反奴隷制への知のコミュニティ形成に向かった経緯を探ることを目的とする。まず、エマソンが理論化したカンバセーションの概念と知のコミュニティの形成を把握しつつ、それ以前のカンバセーションがどのように子供や大人の教育や自己啓発の方法として実践され、その結果、知のコミュニティが形成されたかを考察する。その上でカンバセーションの機能を応用した、メアリー・マン作の『フォアニータ』を再読し、人類の共生に反する奴隷制に対する抗議の声が、カンバセーションを通して導き出され、いかにコミュニティが形成されていくかを考察する。

なお、コミュニティに関して、ドイツの社会学者、F・テンニース（Ferdinand Tönnies）は 1887 年にその著書『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』（*Gemeinschaft und Gesellschaft*）において「ゲマインシャフト」（本質意志に基づく共同社会）と「ゲゼルシャフト」（選択意志に基づく利益社会）の社会進化論を提唱した。アメリカの社会学者、ロバート・M・マッキーバー（Robert Morrison MacIver）は、1917 年に自然発生的なコミュニティと、それから派生し、共通の関心事を持ったアソシエーションとの対比に重点を置いた。アソシエーションはコミュニティの中に無数にあり、対立するものもある（MacIver 24）。さらに、1955 年に G.A. ヒラリー（G.A. Hillery）は、コミュニティに関して学術文献を調査した結果、94 の定義と 16 種の異なった概念があることを明らかにした（鈴木　305-308）。最近では、地域にこだわらず、インターネットにより形成されるコミュニティもある。

本稿は、知のコミュニティを地域、空間を共有し、共通の知的関心を抱き、相互作用を及ぼす人々の集団と考える。

１．エマソンによるカンバセーションの理論化

エマソンは、19 世紀に授業等で実践されていたカンバセーションを理論化し、

様々な角度から著作物において語っている。1841 年出版のエッセー、「大霊」（“The Over-Soul”）において次のように述べている。

> In all conversation between two persons tacit reference is made, as to a third party, to a common nature. That third party or common nature is not social; it is impersonal; is God. And so in groups where debate is earnest, and especially on high questions, the company become aware that the thought rises to an equal level in all bosoms, that all have a spiritual property in what was said, as well as the sayer. They all become wiser than they were. （277）

牧師を辞したエマソンではあるものの、2 人の間でもグループでも熱心なカンバセーションでは、「共通の本質的なもの」、「神」への暗黙の言及がなされるという。そのカンバセーションの仲間は、考えが同じレベルまで高まり、語った人と同様に、語られたことに対して「霊的な所有権」を持っていると気づく。彼らは皆かつてよりも「賢くなる」。エマソンは、1 人では達成できないような高みに達することができるというカンバセーションの機能を指摘している。後述するが、ピーボディやフラーもこの機能、相互向上の機能を共有していたからこそ授業において実践したのである。

このカンバセーションの機能は、エマソンが独自に理論化したものであるが、問答法で知られるギリシャのソクラテスの存在も無視できない。それには、イギリス人のトマス・テイラー（Thomas Taylor）が 1804 年に初めてプラトンの作品を英語に翻訳したことが貢献していると考えられる。それはエマソンが、1850 年に出版した『代表的人間像』（*Representative Men*）に収録の「哲学に生きる人―プラトン」（“Plato; or the Philosopher”）において、プラトン主義の人物としてテイラーに言及していることで示唆されている（40）。周知のことであるが、ソクラテスは著作物を残さなかったのでプラトンの著作物から彼を知るということになる。なお、『代表的人間像』は講演者として著名なエマソンが行った 1845 年から 46 年にかけての講演用原稿を収録していると言われている。19 世紀アメリカに

おいてギリシャの哲学者、ソクラテスやその弟子のプラトンは、知識人の間では日常的に話題にされていた。例えば、エリザベス・ピーボディは、1838 年 7 月 31 日付けの妹のソファイア（Sophia）宛ての手紙で「自己中心」に関して「ソクラテスの格言の真実について本能的にわかっていた」と述べている（*Letters* 206）。さらに、エリザベス・ピーボディの女性のための教室でもソクラテスやその弟子のプラトンをテーマにしている。

エマソンがソクラテスやプラトンに関して彼らの影響力、偉大さを本格的に言及したのは前述した「哲学に生きる人―プラトン」においてである。同書では、ソクラテスとプラトンは完全に引き離すことのできない「二重星」（double star）であると描写されている(70)。ソクラテスの議論、対話好きについては次のように述べられている。

> Nobody can refuse to talk with him, he is so honest and really curious to know; a man who was willingly confuted if he did not speak the truth, and who willingly confuted others asserting what was false; and not less pleased when confuted than when confuting; for he thought not any evil happened to men of such a magnitude as false opinion respecting the just and unjust. A pitiless disputant, who knows nothing, but the bounds of whose conquering intelligence no man had ever reached; whose temper was imperturbable; whose dreadful logic was always leisurely and sportive; so careless and ignorant as to disarm the wariest and draw them, in the pleasantest manner, into horrible doubts and confusion. But he always knew the way out; knew it, yet would not tell it. (“Plato; or the Philosopher” 73)

エマソンによれば、ソクラテスは「真実」と「誤り」に対して真摯に向き合い、自分や相手が「真実」を語っていない時には、進んで自らを修正し、相手を説得した。ソクラテスは「正」と「不正」について誤った意見を抱くことは人間にとって大きな「悪」と考えていたからである。ソクラテスはいつも冷静で論理的であっ

たが、無頓着にみえたので用心深い人でも懐疑や混乱に巻き込まれた。しかし、ソクラテス自身は出口を心得ていた。ソクラテスはまさしく対話を好み、その機能を熟知していた、とエマソンは評価している。

ソクラテスとプラトンに興味をいだいていたエマソンは、『代表的人間像』出版以前の 1841 年出版のエッセー「円」(“Circles”) においては、カンバセーションと円の関係についても述べている。まず、「円」についてみると、以下のように、目が最初の円で、円は自然界のいたるところで際限もなく繰り返される世界の符号の中で最高の表彰である。

> The eye is the first circle; the horizon which it forms is the second; and throughout nature this primary figure is repeated without end. It is the highest emblem in the cipher of the world. (301)

また、エマソンは同書で人の人生は自己進化の円であると言う。以下のように、目に見えないほどの小さな輪（リング）から新しいより大きな円へと飛躍的に四方へと果てしなく広がる。しかし、その程度は「個人の精神の力、あるいは真実性」による。

> The life of man is a self-evolving circle, which, from a ring imperceptibly small, rushes on all sides outwards to new and larger circles, and that without end. The extent to which this generation of circles, wheel without wheel, will go, depends on the force or truth of the individual soul. (304)

さらに引き続き、エマソンは次のように「カンバセーションは円の遊戯」であると述べる。

> Conversation is a game of circles. In conversation we pluck up the *termini* which bound the common of silence on every side. The parties

> are not to be judged by the spirit they partake and even express under this Pentecost. To-morrow they will have receded from this high-water mark. To-morrow you shall find them stooping under the old pack-saddles. Yet let us enjoy the cloven flame whilst it glows on our walls. When each new speaker strikes a new light, emancipates us from the oppression of the last speaker to oppress with the greatness and exclusiveness of his own thought, then yields us to another redeemer, we seem to recover our rights, to become men. (310)

エマソンによれば、カンバセーションは「円の遊戯」であり、カンバセーションでは、我々は沈黙という共有地の四方の境界となる末端の垣根を引き抜く。エマソンは、カンバセーションにおいて人々が語ることを、ペンテコステ（聖霊降臨）を引き合いに出して説明している。これには、ペンテコステでは、天から炎のような舌が一人ひとりの上に降り、信徒たちは聖霊に満たされ、さまざまな言葉で語り始めたということが背景にある。エマソンは、新しい語り手は「新しい火」を放ち、最後の語り手の抑圧から我々を解放し、彼自身の思想の「偉大さと排他性」で我々を圧迫すると述べる。カンバセーションでは、語り手が変わるたびに新しい語り手に圧倒され、カンバセーションは円のように四方に広がり、その円の外にまた別の円もできるのであろう。ここでは「大霊」とは異なりカンバセーションの圧倒性と拡散が強調されている。

さらに、エマソンは 1870 年出版の晩年のエッセー集『社会と個人』（*Society and Solitude*）に収録された「クラブス」（“Clubs”）においても、カンバセーションについて次のように語っている。

> Conversation is the laboratory and workshop of the student. The affection or sympathy helps. The wish to speak to the want of another mind assists to clear your own. A certain truth possesses us which we in all ways strive to utter. Every time we say a thing in conversation, we get a mechanical advantage in detaching it well and deliverly. I

prize the mechanics of conversation. 'T is pulley and lever and screw. (227-28)

エマソンによれば、カンバセーションは学究者の「実験室であり仕事場」である。「他の人の心が必要としていることに言及したいという欲求は、自分自身をはっきりさせるために役立つ」。我々は、あらゆる手段で発せざるをえないのである。また、エマソンは「カンバセーションの機能」を認め、カンバセーションでものを言うたびに、そのことを切り離すことにおいて「機能的な利点」があると言う。すなわち、エマソンはものを語ることにより、それを解き放ち、新たな発展につながると言っているのではないだろうか。

エマソンはソクラテスやプラトンに関心をいだき、カンバセーションの概念を理論化し、その機能として相互向上、圧倒性と拡散、発展性を指摘した。このようなエマソンは、ユニタリアン派の牧師フレデリック・ヘンリー・ヘッジ（Frederick Henry Hedge）やジョージ・パトナム（George Putnam）らとともに1836 年に超絶クラブ（元はヘッジ・クラブと言われていた）を形成し、そこでさまざまなカンバセーションを交わした。1837 年にはフラーなどの女性も初めて参加した。超絶クラブが解散すると、エマソンは 1855 年に討論、カンバセーションを行う新たな知のコミュニティ、サタデークラブを形成した。それは、エマソンや、サミュエル・グレイ・ウォード（Samuel Gray Ward）、法律家のホレショ・ウッドマン（Horatio Woodman）などが非公式に創立した知識人の集まりである。彼らはあらゆるアメリカの改革を急務と考え、討論をするために月に一度ボストンで会食をした。カンバセーションの機能を認めるエマソンだからこそ、超絶クラブやサタデークラブという知のコミュニティを形成したのであろう。彼等は奴隷制に反対していた（Edward Emerson 1-6）。[1] 彼らの知のコミュニティにおけるカンバセーションのテーマは反奴隷制に向かっていったのである。

2．19 世紀アメリカにおけるカンバセーションの実践

19 世紀アメリカで子供の教育にカンバセーションを採用するようになったのは、子供像が 17 世紀植民地時代のピューリタンのそれから、19 世紀のロマン派

の子供像に変化したことと無関係ではない。[2] ピューリタンの子供像は、子供は生来罪に染まっているというものであった。よって、それはアルファベットの教育にも反映され、初期の『ニューイングランド初等教本』（*The New England Primer*）（1690 年までに出版）の A の項目には「アダムが堕落したために、われわれはみな罪人だ」と原罪論が説かれている（Crain 16）。[3] もっとも、イギリスではジョン・ロック（John Lock）が、『教育に関する考察』（*Some Thought Concerning Education,* 1693）において子供は白紙状態（タブラ・ラサ）であるから、子供に対する教育の重大さを説いていたことは周知のことである。ロックの子供像と教育観は、「われわれはみな罪人だ」と説いて子供に恐怖心を与えるピューリタンの教育とは異なっていた。18 世紀にはロックの信奉者であり、賛美歌作者のアイザック・ワッツ（Issac Watts）が、『子供のための神さまと教訓の歌』（*Divine and Moral Songs for Children, 1715*）を出版した。その中には、「幼いころによい指導を受ける子供は幸せである。その子は罪人の歩む道を恐れ、地獄に通じる道を恐れる」とある（Watts 13-14）。教訓的であるもののここからピューリタンの子供像とは異なる点が読み取れる。

19 世紀になると、イギリスではウィリアム・ワーズワース（William Wordsworth）の「虹」（“Rainbow,” 1807）に代表される純粋な子供像が出現したが、その背景にはジャン・ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau）の『エミール』（*Émile, ou De léducation,* 1762）で主張されたロマン派の無垢な子供像がイギリスに伝わったことがある。アメリカでも作家のリディア・マリア・チャイルド（Lydia Maria Child）が『母親のための本』（*The Mother's Book,* 1831）で他の作家とともにワーズワースの詩を推薦し、「ミルトンやワーズワースを十分に鑑賞するには心の成長や自省の習慣が必要である」と述べている（108）。作家ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）らもワーズワースを愛読し、熟知していた。ホーソーンは、1843 年に出版された「小さなダッフィダウンディリー」（“Little Daffydowndilly”）において、ダッフィダウンディリーが成長するにつれて教師の鞭が微笑みに変化することを描き、子供像の変化に応じて教育方針も変化することを示している。

19 世紀アメリカにおいて、子供像が変化するとともにいち早くカンバセーショ

ンを教育や自己啓発の手段として採用し、実践したのは、エマソンと親交のあったエリザベス・ピーボディやブロンソン・オルコットなどである。ピーボディは、1860 年に英語で行われるアメリカで初の幼稚園を開校した人物であり、ホーソーンの義理の姉である。ピーボディは、妹のメアリーと 1828 年に開校したボストンの学校で生徒に暗記を要求せず、生徒と話し合う授業法を編み出した、と作家のキャサリン・マライア・セジウイック（Catharine Maria Sedgwick）は評価している（*The Peabody Sisters* 179）。教育方法としてのカンバセーションが現代では珍しくないが、当時としては画期的な教育方法であったことが、セジウイックの評価からわかる。また、ピーボディは、1831 年に最初の女性向けの歴史のクラスをボストンにおいて開講し、そこで知的討論会を行った（*The Peabody Sisters* 386）。これは女性を狭い役割から解放することを目的とした授業であった。授業の過程は講義から始まり、読書会やカンバセーションに発展していった。ここではエマソンが理論化したカンバセーションの機能が発揮された。また、その後の歴史のクラスにおいてソクラテスやプラトンについての読書も行った。カンバセーションを取り入れたこの授業は女性たちの知のコミュニティ形成に貢献したことは想像に難くない。

ピーボディが授業にカンバセーションを採用した背景には、彼女がまだ子供のころの 1817 年にユニタリアン派の著名な牧師で、その後彼女の生涯のメンターとなるウィリアム・エラリー・チャニングと女性たちが福音書を読んだり、それについて話したりする会合に参加したことがあると思われる。そこでチャニングは「仲間の質問者」（fellow-inquirer）の役割を果たしているようであった、とピーボディは語っている（*Reminiscences* 34）。エマソンは質問により考えを引き出すというカンバセーションの機能をあえて指摘していないが、カンバセーションがソクラテスの問答法に繋がる点を考慮すれば、チャニングがカンバセーションのこの機能を認識していたことは自明の理であろう。さらに、ピーボディは 1827 年から 28 年の冬にチャニング牧師の家と、ボストンの博愛主義者であるジョナサン・フィリプス（Jonathan Phillips）の家で交互に行われた「カンバセーション・パーティー」（conversation party）に参加していた（*Reminiscences* 268）。それは、ユニテリアン派の牧師のジョセフ・タッカーマン（Joseph Tuckerman）や

地元の教師たちで構成された非公式の集まりであった。そこでの話題は子供の教育理論からより実践的な問題へと発展していった（*The Peabody Sisters* 175）。この「カンバセーション・パーティー」の討論のやり方について、ピーボディはドロシア・ディックス（Dorothea Dix）宛ての 1828 年 1 月 24 日付けの手紙で、「どの本よりもこれらのカンバセーションほど喜びをもたらしたものはない」と述べている（*Letters* 83）。ドロシア・ディックスとは、チャニングの弟子でのちに精神を病む人たちのための治療の改革を行い、全米に知られるようになった人物である。エマソンがカンバセーションの機能を理論化する以前に、ピーボディは、「カンバセーション・パーティー」で経験したカンバセーションと、それに集まった人々で形成された知のコミュニティに満足し、その手段となったカンバセーションの機能、相互向上を認識し、自分の授業に取り入れたのであろう。

オルコットは、1834 年 9 月にエリザベス・ピーボディとともに、ボストンでテンプル・スクールを開校した。その学校でもソクラテスにちなむ画期的な教授法、カンバセーションが採用された。その教授法を象徴するように、教室の一方の隅にはソクラテスの像が、片方にはプラトンの像が台の上に置かれていた。オルコットの行ったカンバセーションは、主として教師の質問を通して生徒に「自己点検（self-inspection）」させて、信仰について考えさせるというものである（Alcott iii）。以下はオルコットが 1836 年に出版した『子供たちとの福音書についての会話』（*Conversation with Children on the Gospels*）から抜粋した例である。

> Mr. Alcott asked; Have you a clear feeling of something, which is not your body, which you never saw, but which is, — which loves, which thinks, which feels?
>
> （All gradually held up their hands.）
>
> Now what are your proofs? （Many hands fell.） Those who have proofs may answer in turn.
>
> Lemuel, I am sure of it, but I do not why.
>
> Alexander. I have heard you say so.
>
> Mr. Alcott. You have trusted to me? Well! That is faith in testimony.

William C. I cannot prove it, but I feel it.

Mr. Alcott. You and Lemuel have the evidence of consciousness. You cannot think otherwise.

George K. I thought of my mind as my proof.

Andrew. I thought of my conscience; when I do right I feel that I have one.

William B. I thought and I felt. That is Spirit.

Charles. I felt your question working within me, and that was my proof. (3)

オルコットは、10 歳から 12 歳の子供たちに対して魂（“Spirit”）を自覚させるために、「何か、身体でなく、見たこともない何かに対するはっきりした感情を持ったことがありますか」という質問を通して考えさせ、証拠を求め、魂の存在を認識するように、自己啓発するように導いている。ここでもカンバセーションの機能が発揮されていたようだ。

ところが、テンプル・スクールは長く続かなかった。アシスタント・ティーチャーとしてそこで働いていたピーボディは、授業内容を記録した『ある学校の記録』（*Records of a School and Conversations with Children on the Gospels*）を 1835 年に出版した。オルコットもその 1 年後に前述の『子供たちとの福音書についての会話』を出版した。しかし、オルコットの出版に際し、ピーボディはオルコットが生徒の心、精神や意識のような事柄に関するカンバセーションを掲載することを諦めるようにと依頼していた。それは、1835 年 8 月 1 日付けのエリザベス・デーヴィス・ブリス（Elizabeth Davis Bliss）宛ての手紙から明らかである（*Letters* 151）。さらに、1836 年 8 月 7 日付けのオルコット宛ての手紙で、出版に当たって授業の記録のいくつかを省略すること、オルコット自身の序文もつけること、記録者（ピーボディ）は授業に関してオルコットに全く賛同していたわけではないことなどを記すように単刀直入に依頼している（Letters 150-51）。特に、オルコットの授業の記録の中に、赤ん坊の誕生に関する質問と回答が含まれていることを知ったためにピーボディは、意義を唱えた。その問答は以下のとお

りである。

> Mr. ALCOTT. And what did you think being born was?
> JOSHIA. It is to take up the body from the earth. The sprit comes from heaven, and takes up the naughtiness out of other people, which makes other people better. And these naughtiness, put together, make a body for a child, but the spirit is the best part of it.（Alcott 68）

ジョシアは、赤ん坊の身体は「大地」から取り出し、心は「天」から下り、これらに他の人々からの「やんちゃ」が合わさり、子供の身体を作り、「心はその一番いい部分だ」と答える。ピーボディは、生命に関して教師や両親から教えられるべきで子供たちの空想に任すのはよくない、と思っていたためにこの部分の削除を強く願った（*The Peabody Sisters* 323）。しかし、オルコットはそれを無視して出版したために、ピーボディはテンプル・スクールとの関係を断ち、生徒の親はテンプル・スクールから子供たちを引き上げることにした（*The Peabody Sisters* 325）。ピーボディが問題にしたのは、授業方法のカンバセーションではなく、そのテーマである。こうしてピーボディはカンバセーションを取り入れた学校経営を断念すが、その精神は書店権貸本屋経営に発揮され、公の図書館がなかった時代に本を読む機会を提供し、また、トランセンデンタリストがカンバセーションを交わす場も提供した。

一方、1845 年に『19 世紀の女性』（*Women in the Nineteenth Century*）を出版し、女性解放を唱えたフラーは、「オルコットの授業法を借りて自分の職業に対する大望と女性のための関心事」を統合する実践的な計画を立て、トランセンデンタリストのソファイア・リプレイ（Sophia Ripley）とピーボディに女性の「サークル」を集めてくれるように依頼した（*Margaret Fuller* 132）。その結果、フラーはピーボディがボストンで開店する予定だった書店などにて、女性達のための「談話会」（“Conversations”）を開催することができた。1 回目のシリーズはギリシャ神話について 25 人の女性に対して 1839 年 11 月に行われた。2 回目のシリーズは美術について 1840 年 11 月に、3 回目のシリーズはリプレイ夫妻の家とピーボ

ディの開店間際の書店で 1841 年 3 月から 5 月にかけて行われた（Ronda 234）。[4] その後、「談話会」は 1844 年まで続いた。カンバセーションは行動に対する刺激であるとともに芸術であるというフラーの信念のもとに行われた「談話会」は、「授業というよりもクラブ」であった（*Margaret Fuller* 136）。

もっとも、フラーは談話会について立ち止まって考えることもあった。それはウィリアム・ヘンリー・チャニング（William Henry Channing）宛てに送ったとされる 1842 年 11 月（日付け不明）の手紙において、前日に行った授業、「信仰に関するカンバセーション」の感想からわかる。フラーは、「真実の事柄が徹底的に語られ、感じられた。しかし、今日、その美徳は消えてしまった。私はすべてを受け入れてきたが、それでも疲労する時がやってくるでしょう。私自身と他の人の人間性に関する疲労が」と述べている（Fuller 99）。フラーはエマソンが理論化したカンバセーションの圧倒性に一時的に疲労したのではないだろうか。フラーは「本当の反応や互いに十分理解していることを自覚する楽しみ」が必要であると思っているが、「急いで」無理に行うことはできない、時間がかかると感じていたのである（Fuller 99）。その後、フラーは教育から離れ、1845 年に『19 世紀の女性』を発表し、「ニューヨーク・トリビューン」誌のヨローッパ特派員に任命され 1846 年から 1850 年まで務めたが、帰国の途中に溺死した。

以上のように、紆余曲折はあったものの彼らはカンバセーションの機能を認識し、教育や自己啓発の手段として活用した。その結果、そこに集まった人々はテーマに対して自ら考えるように導かれ、知のコミュニティを形成し、発展することになったのである。

3．『フォアニータ』におけるカンバセーションの機能の応用

『フォアニータ』はメアリー・ピーボディ・マンが、妹のソファイアの転地療養に付き添ってキューバに 1833 年から 2 年間滞在した時の体験をもとに書いた小説である。彼女たちは、ソファイアを治療する医師が所有するプランテーションに滞在した。[5] 医師の子供の家庭教師として滞在したマンは、キューバの奴隷制を目の当たりにして滞在中に執筆を開始し、1850 年代に書き終えたが、本書のモデルとなった人物が亡くなるまで出版は差し控え、マンの没後、姉のエリザベ

ス・ピーボディが 1887 年に出版した。本書がアメリカの奴隷制反対運動に直接影響を与えるには出版された時期が遅かった。しかし、カンバセーションと知のコミュニティという観点から再読すると、教師をしていた作者マンが、カンバセーションを通して『フォアニータ』の登場人物に非人道的な奴隷制について考えさせる機会を与えていることが浮き彫りになる。

『フォアニータ』には、作者マンと同様、マサチューセッツ州出身のヘレンが家庭教師として登場する。ヘレンは、スペイン人プランターの妻、イザベラのかつての学友で、イザベラの子供の家庭教師としてキューバに来る。彼女たちはヘレンが 15 歳の時に、フィラデルフィアの学校で出会った。フィラデルフィアは 18 世紀からクエーカー教徒による奴隷制反対運動があり、ボストンやニューヨークのアフリカ系アメリカ人と一緒に行動していた。PFASS （The Philadelphia Female Anti-Slavery Society ）も 1833 年に設立された。フィラデルフィアでヘレンとイザベラは奴隷制反対運動を目の当たりにしたにちがいない。しかしながら、イザベラがキューバに戻ると、父親と結婚した夫は最悪な場面から彼女を守り、彼女は間もなく周囲に起きていることから目をそらすことを学習し、奴隷制について語ること、カンバセーションを避けてきた。一方ヘレンは、「真実」と「誤り」を鋭く区別した(49)。ヘレンのこの姿勢は、エマソンが描写したソクラテスの「真実」と「誤り」に対する姿勢を思い出させる。少女時代に同じ時間と空間を共有したにもかかわらず、別々の生き方をするようになった２人の女性、イザベラとヘレンの差異は、人間の形成に対する教育や環境（カンバセーションの有無）の重要性を物語っている。エマソンが自己進化の円の広がりの程度は、「個人の精神の力、あるいは真実性」によると述べているが、ヘレンとイザベラの差異に当てはまる。

ヘレンは、カンバセーションという手段を用いて、プランテーションの妻となったイザベラや奴隷商人の娘のツリタから真実の心を引き出そうとする。もっとも、家庭教師という使用人の立場や家父長制を考慮したヘレンは、プランターや奴隷商人に奴隷制について直接疑問を投げかけることはしない。奴隷商人の父親の言うことをうのみにしていたツリタは、奴隷制の残酷性について語るヘレンの言葉に当初反論する。しかし、ヘレンとのカンバセーションの結果、競売におけ

る奴隷の家族離散に対する「残酷」(11) という言葉がようやくツリタの口から出てくる。大人のイザベラは、奴隷制の残酷さも理不尽さもわかった上で、家父長制において発言を控え、豊かな生活をするためにはプランテーション以外、他に手段がないと思い込もうとしている。そのために奴隷制に憤慨するヘレンとのカンバセーションにおいて、イザベラは圧倒され、責められていると感じる。しかし、奴隷制について考えることやカンバセーションを避けてきたイザベラも避けては通れなくなる。ヘレンはツリタとイザベラにカンバセーションを通して奴隷制を考える機会を与え、結果的に彼女たちは奴隷制を考えるコミュニティを形成していることになる。[6]

作者マンの奴隷制に対する見解を述べるのは、イザベルの息子、ルドヴィーコの遊び友達として育ったフォアニータである。フォアニータは自由の身であることをプランターの妻のイザベラは知っているが、周囲の者は知らないためにそのようには扱われていない。フォアニータの祖母はムーア人で、イザベラの義理の父により奴隷として購入され、フォアニータの祖父と父親は白人である。ルドヴィーコに好意を抱くフォアニータは、自由の身であるものの、ルドヴィーコが結婚した後もプランテーションに留まり、奴隷の子供の世話をする。

フォアニータの奴隷制に対する考えは、ルドヴィーコとのカンバセーションを契機に吐露される。イザベラの危篤の際に、ルドヴィーコはフォアニータが自由人であるとは思っていないために「ここから出て一緒に住もう。君の面倒をみる。君は自分の自由が欲しいのか。君のために何をしようか」と申し出る (198)。しかし、保護者も同然であったイザベラの臨終に際してフォアニータは、「自由になってもどこに行くことができるのですか」と絶望感にとりつかれている (198)。実際、後ろ盾のない若い娘が一人で、キューバで生きていくことは困難な時代であった。フォアニータの自暴自棄の様子は、「死が私の持てる唯一の自由です」という言葉にも表れている (198)。フォアニータの奴隷制に対する真実の心を吐露させるのは、ルドヴィーコが再度「君の面倒をみるよ」と言いつつ、「フォアニータ、君は奴隷だ。それは確かだ」という言葉である (198)。フォアニータは、初めて奴隷制に対する自分の考えを次のように語る。

> In the sight of God I am as free as you are, even according to your own wicked laws. My ancestors were not slaves. They were free in their own land, and here they were *emancipados*, and so are many others who are called slaves, though they do not know it. My soul has always been free. The money that bought my grandmother was perjured money, for she was free when she touched this island, by your own laws. She planted the seeds of freedom in the heart of my mother, and my mother planted them in mine. She thought the day might come when justice would be done. (198)

フォアニータの「神の前ではルドヴィーコと同様に自由である」という言葉は、奴隷制そのものを批判している。また、奴隷制のもとでも法的に自由であることを主張している。その根拠として、フォアニータの先祖は母国では奴隷ではなく、キューバでは他の人たちと同様に解放された人たちであることを挙げている。彼らが解放された人であることを知らないことも問題視されている。さらに、フォアニータは奴隷と違わない扱いを受けてきたが、心に植え付けられた「自由の種」から芽生えた魂の自由は誰からも侵されなかったと訴えている。フォアニータの魂は神聖ですらある。さらに、フォアニータ自身は半ばあきらめているものの、母が「正義が行われる日が来る」と思っていたと語ることにより、奴隷制廃止を訴えるとともにそれを予測している。

フォアニータはこれまで自分の境遇を訴えたことはなかったが、ルドヴィーコとのカンバセーションにおいて、理不尽な扱いと奴隷制についての考えを明白にする。ルドヴィーコはフォアニータの言葉に圧倒されるが、これはマンがカンバセーションの機能を認識して、作家の信条をフォアニータに語らせたと考えられる。幼い頃から奴隷制に対して嫌悪を抱いていたルドヴィーコは(53)、フォアニータにヘレンと一緒にマサチューセッツに行き、自由になることを勧める。ルドヴィーコもフォアニータの言葉に動かされ、彼自身の発展へと繋がる。この作品はカンバセーションの機能を応用して描かれていると言える。

おわりに

19 世紀アメリカでは子供像の変化とともに、教育方法も変化し、ピーボディやオルコットはカンバセーションをテンプル・スクールの教育方法として取り入れた。また、ピーボディやフラーは大人の女性のための教育においてカンバセーションを採用した。彼らは、対話により考えが引き出され、相互向上し、さらに発展させることができるというカンバセーションの機能を認識し、実践した先駆者である。今日のアメリカのディスカッション形成の授業はここに原点がある。一方、ソクラテスの問答法に関心を抱いていたエマソンは、カンバセーションの概念を理論化した。また、カンバセーションの機能を認識していた作家のマンは『フォアニータ』において、カンバセーションの機能を応用し、登場人物から反奴隷制の考えを引き出させる。登場人物たちは、カンバセーションを通してゆるやかなコミュニティを形成していく。

19 世紀の知識人は、カンバセーションを通して空間を共有し、共通の知的関心を抱き、知のコミュニティを形成し、そのコミュニティにおいてさらにカンバセーションを深め、知的に向上していった。彼らの共通の関心事は人類の共生に反する奴隷制廃止へと向かっていったのである。

注

1. 作家のナサニエル・ホーソーンも英国滞在中の 1859 年にサタデークラブのメンバーに選ばれ、帰国してから会合に参加したが、サタデークラブではもっぱら聞き役であった。
2. 子供像の変遷に関する詳細は、倉橋洋子「ホーソーンの子供像と空想―『緋文字』と『ワダー・ブック』を中心に―」『テクストの内と外』東海英米文学会編，成美堂，2006，pp. 127–29 参照。
3. 『ニューイングランド初等教本』は、内容を変えつつ 20 世紀まで使用された教科書である。18 世紀の第一次大覚醒時代には『ニューイングランド初等教本』のアルファベットの学習は一層宗教色が濃くなった。その一方で趣旨の異なる本も出版され、『子供の新しい遊び道具』（*The Child's New Plaything,* 1750）では、A の項目は「アップル・パイ」となっている（Crain 66）。
4. 倉橋洋子「エリザベス・ピーボディの出版界への進出 ―ホーソーンの初期作品の出版を中心に―」『東海学園大学紀要』第 21 号，2016，p. 55 参照。
5. スペインは 1820 年に奴隷制を廃止したが、植民地のキューバの奴隷制は黙認していた。

キューバの黒人奴隷制度は、ヨーロッパから武器、西アフリカから奴隷、西インド諸島から砂糖などを輸出する三角貿易により成立していた。キューバでは 1812 年から断続的な奴隷の暴動があり、メアリー・ピーボディ・マンの訪問した 1833 年前後は、そのためにヨーロッパやアメリカに帰国したプランテーションの所有者もいたが、その一方でソファイアのように療養のためにキューバに出かけた人々もいた。

6. 奴隷制に対するヘレンのイザベラやツリタとの対話の詳細な分析については、倉橋洋子「キューバにおける捕囚と抵抗―メアリー・ピーボディ・マンの『フアニータ』」『越境する女―19 世紀アメリカ女性作家たちの挑戦』開文社，2014 年参照。

引証文献

Alcott, Bronson A. *Conversation with Children on the Gospels*. Ed. Bronson A. Alcott, vol. 1, James Munroe and Co., 1836.
https://archive.org/details/conversationswit01alco.

Child, Lydia Maria. *The Mother's Book*. Carter, Hendee and Babcock, 1831.
https://archive.org/details/mothersbook1831chil.

Crain, Patricia. *The Story of A: The Alphabetization of America from The New England Primer to the Scarlet Letter*. Stanford UP, 2000.

Emerson, Ralph Waldo. "Circles." *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson: With a Biographical Introduction and Notes by Edward Waldo Emerson and a General Index*, vol. 2, 1903, pp. 299-322.
https://quod.lib.umich.edu/e/emerson/browse.html.

---. "Clubs." *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, vol. 7, 1904, pp. 223-250.

---. "The Over-Soul." *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, vol. 2, 1903, pp.265-297.

---. "Plato; or the Philosopher." *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, vol. 4, 1903, pp. 39-89.

Emerson, Ralph Waldo, W.H. Channing and J.F. Clarke. *Memories of Margaret Fuller Ossoli*. Vol.1, Robert Brothers, 1884.
https://archive.org/details/memoirsmargaret05clargoog.

Fuller, Margaret. *The Letter of Margaret Fuller*. Ed. Robert N. Hudspeth, vol. 3, Cornell UP., 1984.

MacIver, Robert Morrison. *Community: A Sociological Study; Being an Attempt to Set out the Nature and Fundamental Laws of Social Life*. Macmillan, 1917.

Mann, Mary Peabody. *Juanita: A Romance of Real Life in Cuba Fifty Years Ago*. Ed. Patricia M. Ard, UP of Virginia, 2000.

Marshall, Megan. *Margaret Fuller: A New American Life*. Houghton Mifflin Harcourt,

2013.
---. *The Peabody Sisters: Three Women Who Ignited American Romanticism*. Houghton Mifflin Company, 2005.
Peabody, Elizabeth. *Letters of Elizabeth Palmer Peabody: American Renaissance Woman*. Ed. Bruce A. Ronda, Wesleyan UP, 1984.
---. *Reminiscences of Rev. WM. Ellery Channing, D.D*. Roberts Brothers, 188 https://archive.org/details/reminiscencesofr00peab.
Ronda, Bruce A. "1840s; from the School to the World." Peabody, *Letters*, pp. 231-237.
Watts, Issac. *Divine and Moral Songs for Children*. 1715. https://archive.org/details/divinemoralsongs00watt.
Zwarg, Christina. *Feminist Conversations: Fuller, Emerson, and the Play of Reading*. Cornell U, 1995.
Maciver, Robert M. *Community, a Sociological Study*. Macmillan and Co., 1917.
倉橋洋子「エリザベス・ピーボディの出版界への進出 ―ホーソーンの初期作品の出版を中心に―」『東海学園大学紀要』第 21 号，2016.
---.「キューバにおける捕囚と抵抗―メアリー・ピーボディ・マンの『フアニータ』」『越境する女―19 世紀アメリカ女性作家たちの挑戦』開文社，2014.
---.「ホーソーンの子供像と空想―『緋文字』と『ワダー・ブック』を中心に―」『テクストの内と外』東海英米文学会編，成美堂，2006.
鈴木広編　『都市化の社会学』増補版，誠信書房，1978.

キーワード：19 世紀アメリカ、カンバセーション、知のコミュニティ、反奴隷制

（くらはし　ようこ　東海学園大学　経営学部教授）